

親鸞聖人のご生涯とその今日的意義

親鸞さまは 1173 年 5 月 21 日に京都日野でお生まれになり 1263 年 1 月 16 日に 90 歳でお亡くなりになりました。

親鸞聖人は仏教のなかの「浄土真宗」という宗派の開祖であり、主著は『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』ですが、それより有名で読みやすいのは『歎異抄（たんにしょう）』です。こちらは弟子の唯円さんが親鸞さまの言葉を書き記したご本ですので、親鸞聖人の肉声がきこえてくるような、鮮烈な言葉がたくさんでできます。



① 「生死出ずべき道」

親鸞聖人は早くにご両親を亡くされ、幼稚園の門をはいて左の童形像が示すような年ごろ、9 歳で出家得度され、比叡山で学問と修行に励まれました。

求めたものは「生死（しょうじ）出（い）ずべき道」です。つまり死を忘れたりおびえたりし、生をむさぼったり迷ったりするというのが、「生老病死」に苦しみ「生と死」という枠組みにとられる生き方です。そこから脱却する道が「生死出ずべき道」です。

しかし、迷いを離れる道を見いだすことができず、29 歳の時、比叡山を下りて、師匠となる法然上人に遇われ、限りないものに貫かれるという経験をなさいます。永遠の光は煩惱に曇ったまなこでは見ることはできません。しかし、永遠の光がみずから言葉となって私に届けられているのだという経験をされたのです。それが南無阿弥陀仏を聞き・となえるということです。阿弥陀様の声を聞きその名を呼ぶ時、阿弥陀仏は南無阿弥陀仏という言葉となってそのひとを内から包み込むのです。それは、世の中でしか位置をもたなかった自分が、限りない宇宙のなかに位置づけられたという、自己転換。そこから来る安心です。



② 「自信教人信」

35 歳の時、念仏をとらえてはいけないという弾圧によって、越後に流罪とされます。その後、関東に移られます。それらの土地での聖人は「自信教人信（じしんきょうにんしん）」という生き方をされました。「自ら信じる」＝私がどのようなであってもおさめとって見はなすことはないという阿弥陀さまの言葉を疑いなく受け入れるとともに、「教人信」＝揺るぎのないものがあることをひとにも伝えて信心を獲てもらうという生き方です。

③ 「自然法爾」

晩年は京都に戻ってこられて、たくさんのご著書を書かれました。その境地は「自然法爾（じねんほうに）」と言ってよいでしょう。自然（じねん）に＝阿弥陀様のはからいのま

まに、生きるということです。

阿弥陀さまが私たちにどのように働きかけてくださっているか、自らの宗教体験とそこから伸びてくる生き方を哲学的な体系として著したり、詩的に歌いあげたりなさいました。

このような親鸞さまの御苦勞のおかげで、もしかしたらうつむいてしか生きられなかったかもしれない私たちが、星を仰ぎ見ることができるようになったと言ってもいいかもしれません。



親鸞聖人が生涯かけて説かれたことはシンプルですが、だからといって「わかりやすい」とは言えないでしょう。わかりにくさの理由は色々あるけれど、例えば750年前と今とでは時代状況があまりに違いすぎるということがあります。それぞれの時代にはその時代特有の考え方があります。

例えば、現代では人間は基本的な権利をもち尊重されるべきものと教えられていますが、親鸞さまは人間のことを「罪悪深重の凡夫（ざいあくじんじゅうのぼんぷ）」と呼びます。教科書にも出てくる「悪人こそが救いの対象だ（善人なほもて往生をとぐ。いはんや悪人をや）」という宗教思想は、必ず誤解されます。

今は「他力本願」はいけないことで、「自力」で努力することがよいことだと考えられています。親鸞さまの教えの中心は他力です。他力は阿弥陀様の力、本願は阿弥陀様の願いです。短いスパンで変わる私たちの願いや欲求ではなく、変わることのない大きな願いが私たちにかけられていることを聞き定めていくということです。

仏の願いだなんて、そもそも神や仏なんて存在しない。人間の空想の産物だ。そんな考えも根強いでしょう。それに伴って、地獄も極楽も作り話だ。死んだら終わりだという考えも多くの人々の常識です。それに対し、聖人は「死ぬ」ことを生まれることだ（「浄土往生」）と言います。

仮に、浄土が想像の産物だとしたら、「死んだら終わり」というのも同様に想像の産物です。自分の想像力が及ばないので真っ暗なのです。そこで言っている「終わり」とは、実は自分の想像力の限界だという自白にすぎないのです。人間の限界、私の限界、こちらからはどうにもできない状態、そこで何が起こるか、そこで何が見えるか、そこが、人間の想像力の次元を超え、人間のはからいを超えた世界であり、そここそが本当の意味での宗教の世界なのです。

聖人の考えは、現代人の私どもと前提が全く違うので簡単にはわからないということは、今の時代の外にあるということです。だからこそ、聖人の思想はむしろ時代が混迷し行き詰った時に輝き出すのです。星は遠いからこそ位置を教え、しかもその遠くからの光はここまでも届くのです。



プトラくんとプトリちゃん